

# 栽培者からみた現代南島における 伝統的畑作穀類栽培の展開

賀 納 章 雄

## I. はじめに

水の確保に困難な土地条件の多い南島では、その農業は自ずと畑作が中心となっている。現在は、サトウキビが基幹作物として栽培されている地域が多いが、かつては、アワやムギなどの畑作穀類が重要な作物・食料として高い位置づけをもって栽培されていた<sup>(1)</sup>。アワなどの畑作穀類は、近世においては徴税の対象であり、また各地の祭祀・儀礼の主対象ともなった。しかし、第二次世界大戦後、生活の質的变化とともにコメの入手が容易になると、それら畑作穀類の栽培は次第に行われなくなり姿を消していく。ところが、一部地域においては、その栽培が今日まで続いたり、あるいは一旦途絶えた栽培が再び復活するという状況がみられる。例えば、沖縄諸島の渡名喜島と粟国島では、戦後に一旦途絶えていたキビ栽培が、新たに種子を導入するという形で復活した。また、八重山諸島の波照間島や石垣島などでは、戦後も一部で続けられていたキビ栽培が、近年になって拡大の傾向にあり、特に波照間島では1994年以降爆発的ともいえる増加をみせている。

こうしたキビ栽培の復活・拡大の背景には、まず南島地域社会において今日も畑作穀類栽培の伝統が根強く生き続けているという基盤があった。その中で、栽培されているキビがモチ性であったことや農業従事者の高齢化、栽培の機械化などの要因、および自家消費分も多いもののキビが商品作物的性格を帯び流通にものという今日的な社会状況に合う作物として脱皮したことなどが、キビの栽培拡大へと繋がった<sup>(2)</sup>。

一方、キビのように栽培が拡大するという傾向にはないが、祭祀や儀礼での必要性や個人的な思い・嗜好などから伝統的畑作穀類が栽培されている場合がある。例えば、八重山諸島の竹富島では種子取祭に必要なことから、また宮古諸島の伊良部島佐良浜ではアワの収穫儀礼に必要であることから、それぞれ地域的にまとまった形でアワの栽培が今日まで続いている。そして、これら2島でアワ栽培が続く背景にも、地域社会と密接な関係にある祭祀の存在とともに、その祭祀の成立基盤ともなる畑作穀類栽培の伝統が地域社会に息づいていることがあげられる。ただし、一見、古くより変わることなく脈々と続いているように思われるこれらの畑作穀類栽培も、実際にはかつてそれが日常生活の食として位置づけられていた時代とは異なり、その位置づけは現在の社会状況に応じる形で変化している。そして、これらの畑作穀類栽培は、その作物が必要とされる祭祀が行われる地域社会の中だけで存在意義をもつという状況であった<sup>(3)</sup>。

このように、現在も南島の一部地域では伝統的畑作穀類の栽培が行われているが、各々の作物

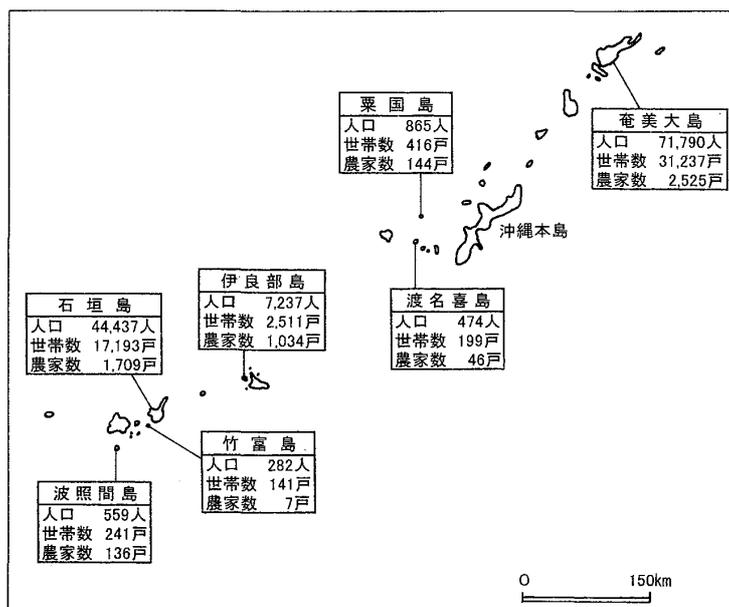


図1 調査地域概要図

\*人口・世帯数は2000年4月1日の住民基本台帳（(財)日本離島センター編『離島統計年報』2003）による。農家数は2000年農業センサスによる。

が地域社会においてどのような位置づけをもって栽培されているかによって、また地域の事情などにより、その地域的展開に違いがみられる。

筆者は、これまで主に栽培地の地域的枠組みをもって現代南島における伝統的畑作穀類栽培の展開をみてきた。そして、地域ごとに一定の傾向や特徴がみられることを論じてきた。さらに、その栽培に携わる人たちの意志や行動には、同じ地域でも多様な側面があることをも実感させられてきた。また、それら栽培の地域的展開には、ある一個人の行った行動が後に大きな影響を及ぼしているというような状況も認めることができた。

そこで、本稿では、伝統的畑作穀類栽培の地域的特徴を現出する上で基礎的要素といえる栽培者の意志や行動というものに焦点をあて、南島における伝統的畑作穀類栽培の展開について検討を加える。そして、その実態を明らかにし、南島における伝統的畑作穀類栽培の地域展開のさらなる理解を得たいと考える。

なお、先述したように、今日の伝統的畑作穀類の栽培は、大きくはキビのように換金性・嗜好性をもって栽培が拡大する傾向にあるものと、祭祀にとまなうなどあまり広がりを見せず限定された地域内で行われる栽培とに分けられる。そこで、本論を進めるにあたっては、まずこの2つの枠に沿って事例をあげた後に検討を行うこととする。また、ここであげる事例には、すでに別稿で述べた部分もあることを断っておく。

## II. キビ栽培をめぐる人々

### (1) 栽培の復活をめぐる

キビ栽培の復活に関する事例をみるにあたっては、まずは渡名喜島と粟国島において種子を新

たに導入し、栽培復活の契機を作った人たちについてみる。

渡名喜島と粟国島では、戦後にキビの種子が途絶えてその栽培は行われなくなったが、先に渡名喜島において栽培の復活が果たされた。それは役場主導によるものであった。最初、1973年に当時の村長のAさん（男性：生年不詳）が石垣島から知り合いを通じてキビの種子を取り寄せたが、普及しなかった。そして、再び1975年に熊本県天草地方から取り寄せた種子が農家に受け入れられ、本格的に栽培が復活することとなった<sup>(4)</sup>。

この栽培復活の先導役を果たしたAさんは、どうしてキビの種子を渡名喜島に取り寄せたのかというと、当時、渡名喜島の農業は主力となる作物を欠いていた。そこで何か基幹作物になるものはないかと考えていたところ、かつて伝統的に栽培されていたキビなら高齢者にも栽培できるのではないかと思いつき、その種子を取り寄せたという。この時点においては、特にキビに対して商品的価値を認めていたわけではなかったという。

このAさんの話からは、このキビの種子導入が、商業的な思惑よりも、キビに対しての伝統的な思いが契機になっていることがわかる。そして、こうしたキビに対する伝統的な思いは、粟国島での栽培復活にも契機としてあった。

粟国島におけるキビ栽培の復活は、1981・82年頃に島の一農家が、先に復活を果たした渡名喜島の親戚からその種子を送ってもらったことに始まる。種子を取り寄せたBさん（女性：生年不詳）はそのきっかけがキビを食べたいとか売りたいとかではなく、キビが昔粟国島で作られていた作物だからもう一度自分で作ってみたいと思ったからだという。そして、Bさんが取り寄せたキビの種子が知り合いなどに分けられて、粟国島で徐々に栽培が広がっていったという<sup>(5)</sup>。

このように、渡名喜島と粟国島とでキビの種子を再び導入した人たちの話からは、そのきっかけが、かつて島で栽培されたキビに対しての伝統的な思いが根底にあったことがわかる。そして、その思いは、キビだけに向けられたものではなく、かつて島で栽培されていたアワやムギなどの畑作穀類栽培全般の中で培われた伝統を背景としたものであった。

それは、脱穀調整や味などの点で定着しなかったが、渡名喜島ではキビの種子導入と同時にアワの種子が取り寄せられていた。また、粟国島でも1980年代に当時の村長がアワの種子を取り寄せ一部の農家に分けられたという。粟国島の場合、すでにキビ栽培を復活させていた渡名喜島やアワやキビの栽培が比較的残存していた竹富町の村町長間の交流からの思いつきであったというが、キビばかりでなく、かつて南島で最も重視された畑作穀類の1つであるアワまでもが導入されていた事実は、この地域における伝統的畑作穀類の栽培全体に対しての人々の思いの深さを示すものといえる。

さて、以上のように、渡名喜島と粟国島では種子が新たに導入され、キビ栽培が復活・拡大していったのであるが、八重山の波照間島や石垣島でも以前よりキビの栽培が少ないながら続いていた。そして近年その栽培が再び拡大している。ただし、そこでも新たな種子の導入があり、現在では新たに導入されたキビ品種の方が広く栽培されているようである。

波照間島や石垣島では、以前よりモミが鶉のように黒っぽいウズラシ（キビをシンという）とよばれるモチ性の品種が細々と栽培されていたが、1987年に波照間島のCさん（女性：1910

年代後半生まれ)が渡名喜島から入手した、モミが白っぽいスーシン(白をスーという)とよばれる品種が今日では広く栽培され、それが石垣島をはじめとする他の八重山の島々にも広がっている。

Cさんが、スーシンの種子を入手したきっかけはまったくの偶然であった。1987年4月、Cさんは親戚の結婚式出席のため那覇に行き美容院に入ったところ、たまたま常連客である渡名喜島の人があり、那覇に在住のCさんの妹さんと話をした。そこで、渡名喜島にモチキビの上等なものが入ってきて、その単価も良いというような話になり、Cさんもその話を聞いていた。そして、Cさん自身、年をとりサトウキビ栽培を行うのがつらくなり、何とかしたいと考えていたので、その美容院に通っていた妹さんに、もしその渡名喜島の人と連絡がとれれば、キビの種子を分けてもらえるように頼んでいたところ、その年の10月に3合ほどのキビの種子が送られてきた。しかし、Cさん自身は翌年に病気となり、代わりに義妹さんや知り合いの人に種子を分け、それが栽培され種子が増え、渡名喜島からのキビの栽培が広がっていったのだという。

Cさんの場合、サトウキビに代わるものと考えていたところに渡名喜島のスーシンを知ったという。この点で、前2者の渡名喜島と粟国島の場合と異なり、新たな品種のキビに少なからず収益性という面での期待があったものといえるが、ここで注目すべきは、渡名喜島に導入された熊本産のキビの種子が、個人の行動によって、南島の他の地域にまで広まっているという事実である。これについては、また後ほど詳しく検討してみたい。

## (2) 栽培の実践をめぐって

今日、渡名喜島や粟国島、波照間島などでキビ栽培が定着・拡大した要因の1つに、栽培の機械化が進んだことがあげられる。渡名喜島では、キビの種子導入に引き続き、村役場が早い時期からその環境整備に力を入れ、トラクター牽引式の播種機や精白から袋詰めまでのオートメーション設備などが整えられた。また、粟国島では、キビ栽培復活当初は役場などの公的機関がそれに関わることはなく、キビ栽培に必要な播種機や精米機などは農家が個人的に購入し、それが農家間で貸し借りされていた。しかし、2001年より役場主導で整備されたキビ製造プラントが稼働を始め、やや遅ればせながら役場による機械化整備が進められている。

これに対して、波照間島をはじめとする八重山各地でのキビ栽培をみると、役場などの公的機関の関わりはそれほど積極的でなく、特に農業機械の導入については、これまでのところ各農家が個々で行っている状況である。そして、波照間島の場合、一個人のとった行動が契機となり、後に農業機械の導入が進んだという事実がある。

今日、波照間島では、キビの精白には精米機が用いられているが、以前はミキサーで少量ずつ精白するか、量の多い農家は精米機のある石垣島までキビを運んで精白したという。そうした中、1980年代末頃、島で精米機を購入しようという話がもちあがった。しかし、なかなか事が運ばず、当時農協関係者であったDさん(男性：1930年代前半生まれ)が個人的に精米機を購入したところ、その後、その利便性をみた他の農家も購入するようになったという。また、現在キビの収穫には、コンバインを用いられることが多くなったが、これもDさんが、1994年に中古

コンバインをテスト試用し、翌年に新しいコンバインを購入したことに端を発している。

このように、波照間島では、一個人が農業機械導入の口火を切り、その後、他の農家も精米機やコンバインを購入するなどして、機械化が進み、キビ栽培が増大した<sup>(6)</sup>。

ところで、波照間島の農業の基幹作物はサトウキビであり、キビは主軸であるサトウキビとの組み合わせで栽培されている。そうした中、サトウキビ栽培をやめ、キビ栽培に専従するという農家が現われた。

Eさん（男性：1930年代後半生まれ）は民宿や商店の経営とともに農業を行っているが、キビ栽培は島でキビ栽培が急増した後の1995年から始めた。その後、サトウキビ栽培をやめて、キビ栽培にかけるということで、1998年の時点で休耕地などを借りるなどして約5~6haの畑でキビを栽培し、栽培の機械化によって収益を上げようとしていた。例えば、島で唯一のグレインタンク方式のコンバイン<sup>(7)</sup>を購入したり、収穫したキビの乾燥には天日干しが一般的である中、天日乾燥では天候に左右され易いということで乾燥機を購入した。当時、乾燥機によるキビの乾燥は、キビの品質や色の変化などのより農業改良普及センターではまだ試行の段階であり、渡名喜島や粟国島でも導入されていなかった<sup>(8)</sup>。その後、Eさんの試行により、2000年時点で乾燥機の運用は順調であったという。

また、Eさんは、栽培の機械化だけでなく、経営戦略面にも積極的に取り組んでいた。例えば、収穫したキビは石垣島の商店に売られたりするが、Eさんは、1997年から沖縄本島那覇の商店とも取引きをもつようになった。そして、Eさんは仲介料無しで島の10数軒の農家からもキビを集めて、それを那覇に送るということもしていた。この他、キビの生育が悪いときは、収穫はコンバインが使えず手刈りとなり、そうした場合には経済性に欠けるということから、知り合いに無償でキビを提供し収穫させていた。さらに、可能であることはわかっているが、台風などの影響でほとんどの人は行っていない二期作についても取り組み、少しでも収益を上げることに努めていた。

このように、キビ栽培に意欲的に取り組んでいたEさんであるが、残念ながらその後病気のため、その取り組みは頓挫した。しかし、波照間島において、Eさんのように積極的な商業的意図をもってキビ栽培に取り組む人がいたことは、栽培者の様々な行動を知る上で興味深い事例であるといえる。

さて、キビは、商品作物的意図をもって栽培されるとともに、キビをコメに混ぜて炊くとモチ味が出ておいしいということから、もっぱら自家用に栽培する人たちもいる。例えば、キビを換金作物として位置づける農家が比較的多い石垣島白保<sup>(9)</sup>のFさん（女性：1950年代後半生まれ）もそのような1人である。

Fさんは父母と3人で暮らし、父母はかつて漁業やサトウキビ・水稻栽培、養豚などを行っていたが、現在はそれらをやめて年金生活するようになり、自家用に野菜類やキビなどを栽培している。Fさん自身はかつて機織りをしてが、父親が高齢で農作業がつからそうであり、それでも農業を続けたそうであったことから、10年程前（2003年時点から）に機織りをやめ、家で農業をするようになったという。調査時でFさんは40歳代と若いですが、子供の頃から農作業を手伝って

いたので父親と同じように何でもわかるといい、キビを栽培するのも父親がキビなどの穀類が好きであったことから、Fさん自身も好きで作っているという。

Fさんは、2000年の時点で2か所の畑でキビを栽培していた。1か所は集落はずれにあり、この畑は、親戚がサトウキビを栽培するということで貸しており、サトウキビ作の合間にFさんがキビを作るという。また、もう1か所の畑はFさんの屋敷横にあり、ここでは主にキビや野菜類が作られ、この畑でのキビの作付けは少ないということで、収穫はノコギリガマで穂刈りするという。また、収穫後は穂を天日乾燥して、自動車で踏んで脱穀し、再度天日乾燥の後、精米機で精白するという。なお、集落はずれの畑の収穫については、知り合いからコンバインを借りて行うという<sup>(10)</sup>。

ちなみに、白保では手間のこともありキビの除草を省略気味にする傾向にあるが、Fさんは比較的しっかりと除草作業をする。特に、集落はずれの畑ではコンバインを借りて収穫を行うので、雑草をコンバインに詰まらせてはいけないということで、除草をきっちりするという。

このようにキビ栽培の実践をめぐることは、Eさんのようにキビ栽培を商業的戦略の中に位置づけ、機械化を積極的に推し進めている人がおり、一方では、Fさんのように自分たち家族が好きなのでキビを自家用に栽培するという人がいる。ここで、すべてのキビ栽培者の例をあげることはできないが、このほかにキビ栽培に携わる人たちには、主に自家用としてキビを栽培しているが、多少は商店などにキビを卸して換金するという、EさんとFさんの中間的なスタイルをとる人たちも多い。つまり、キビの栽培者は、商業目的と自家用という2つの目的の間で、栽培者個々の事情に合うバランスで、それぞれの栽培実践を行っているのである。

### Ⅲ. 祭祀や個人的栽培をめぐる人々

#### (1) 栽培復活をめぐる

現在、祭祀等にもなっている行われている伝統的畑作穀類の栽培をみると、その栽培は地域内で途絶えることなく続いているものと、一旦は途絶えた栽培が再び復活したというものがみられる。

石垣島白保では、アワは1970年代頃から栽培されなくなったというが、Gさん（女性：1910年代後半生まれ）は、宮古諸島の伊良部島佐良浜でアワが栽培されているのを見て、15年ほど前（1998年時点から）に佐良浜の親戚筋からアワ（ウルチ性）の種子を分けてもらい再び栽培を始めた。Gさんがアワの種子を取り寄せた動機としては、農作物に興味があり、自分の興味のあることは何でもしてやろうという気があったからだという。そして、現在は、白保の豊年祭にアワを供するためということで栽培しているという。

また、Gさんが取り寄せたアワは、西隣の宮良集落にも伝わっていた。宮良のHさん（男性：1930年代前半生まれ）は2001年に他界されたが、筆者が2000年に聞き取りした時点でアワを栽培していた。アワの種子は7～8年前（2000年時点から）に知り合いであるGさんから分けてもらい、結願祭用にと2坪程度の広さで栽培していた。Hさんがアワを栽培するのに

は、Hさんの奥さんの叔母が神司であり、一度結願祭用にとアワを作ったら、祭祀と関わりの深い叔母の存在もあり、ずっと作るようになったという。ちなみに、宮良の結願祭は毎年ではなく神年といわれる年だけに行われるが、Hさんは種子を絶やさないようにと毎年アワを栽培しているとのことだった。

現在、Hさんは亡くなり、結願祭のためにアワを作る人は宮良にいなくなったが、宮良には自家消費用にとアワを栽培する人がもう1名いる。

Iさん（1930年代前半生まれ）は、役所を退職後、牛の飼育を中心に農業経営を行っているが、4～5年前（2004年時点から）にアワ（ウルチ性）の栽培を始めた。Iさんがアワ栽培を始めたのには、まずアワが昔作られていた作物であるからとの思いがあったという。またもう1つは、Iさんは郷土研究に長年取り組んでおり、その中で雑穀等の民俗学的研究を行っている研究者J氏との出会いが1つのきっかけであったともいう。そして、アワの種子は、白保のGさんとJ氏から分けてもらったといい、アワは祭祀用としてではなく食べるために栽培しているという。また、Iさんはアワだけではなく、キビの栽培も5～6年前から始めており、さらに、南島では在来的に栽培されていないヒエについても2003年から栽培を始めた。ヒエ栽培については、八重山ではヒエが栽培されていないことから、J氏にやってみないかと勧められたことがきっかけで、種子についてはJ氏より日本本土のものが送られたという。

Iさんの場合、アワが昔作られていた作物であるという思いとともに、研究者との交流が栽培を始めるきっかけとして大きく働き、さらにキビとヒエの栽培まで始めた。これはヒエ栽培の今後の展開を含めて興味深い事例といえる。

さて、ここに述べた白保と宮良の事例は、新たに他所からアワの種子が取り入れられて栽培が始められたというものであるが、これとは異なり、地域内においては古くより栽培が続いているが、個人的にはそれまで栽培に携わっていなかった人が、何らかのきっかけをもって栽培を始めるという事例がある。

竹富島では、モチ性のアワが種子取祭でイーヤチというモチ<sup>(11)</sup>を作るのに欠かせないということから今日まで作り続けられている。現在その栽培者は農業の衰退と栽培者の高齢化により少なくなっているが<sup>(12)</sup>、そうした中、最近になって新たに知り合いから種子を分けてもらって作り始めた人がいる。

Kさん（男性：1920年代後半生まれ）は、長年東京で暮らしていたが、定年後2000年に島へUターンし、アワ栽培を始めた。栽培を始めたきっかけは何となくということであるが、Kさんの奥さんの家筋が種子取祭で重要なホンジャーという芸能を行う家であり、ホンジャーはアワ穂などをつけた杖をもって舞台上に登場することから、それに良いアワ穂を供したいということもあったといい、アワ栽培を始めるきっかけとしては、ホンジャーとの関係も背景にはあったのだろうと思われる。

また、現在石垣島に住むLさん（男性：1930年代後半生まれ）は、竹富石垣郷友会の会長をしていた1996年に行われたふるさと祭りという催しで、イーヤチを作り、またコムギ粉で昔ながらの天ぷらを作ったことを契機に自分自身でもアワやコムギを作ろうと思い、アワ・ムギばか

りでなくキビやモロコシの種子も入手して栽培を始めた。Lさんの場合、高校の教師で長年郷土芸能クラブの顧問をし、定年後も非常勤で郷土音楽を指導しており、郷土芸能と関連して、そこに登場するアワやムギなどの五穀について生徒に説明しなければならないということもあり、それらの栽培を実際に始めたのだともいう。そしてLさんは、収穫したアワを竹富島の種子取祭のために知り合いに分けたりするという。

このように、竹富島では年々アワの栽培者が減少する傾向にあるが、KさんやLさんのように、新たにアワ栽培を始めるという人もいる<sup>(13)</sup>。そして、これまで農業に携わってなかった人が新たに畑作穀類の栽培を始めるという状況については、伊良部島においても認めることができた。

伊良部島佐良浜では、アワの収穫儀礼であるアービューイにおいてアワの神酒を作るために、アワ栽培が行われている。その栽培農家の実数は不明であるが、筆者が2004年5月に確認した範囲では70カ所以上の地点でアワが作付けられていた。そして、筆者が話を聞いたアワ栽培者の1人であるMさん（男性：1920年代後半生まれ）は、若い頃から台湾へ行ったり、南洋でのカツオ漁に従事するなど伊良部島から離れた生活を長く送っていたが、70歳を機にしてアワの栽培を始めたという。

このように、Kさんをはじめとする例は、地域内で脈々と続いているようにみえるアワ栽培も、実は親から子へというような家内での直接的な栽培の継承だけでなく、それまでアワ栽培とは関わりの薄かった人が、何らかのきっかけにより、新たなる栽培の継承者となっているという点で注目される。

ところで、Lさんがアワとコムギの種子を分けてもらったのは、竹富島のNさん（男性：1910年代前半生まれ）という人からだった。Nさんは、戦前に台湾に渡り郵便の仕事をしていましたが、終戦後竹富島に戻り、10年ほど農業をした後、石垣島に住み移り会社勤めをし、70歳を機に竹富島に戻ってきたという。そして、Nさんも竹富島に戻って再びアワの栽培を始めたという。また、コムギについては、かつて戦前に日本本土から導入されたサイタマとよばれる品種があったものの、それは戦後次第に栽培されなくなり、3～4年前（2002年調査時より）にNさんが埼玉に住む親戚を通じて再び取り寄せたものだという<sup>(14)</sup>。そして、そのコムギがLさんの手にも渡ったのである。

ちなみに、Nさんは、コムギは祭祀のためにということではなく、自家消費用として栽培していた<sup>(15)</sup>。Nさんはその後他界され、現在、竹富島でムギを栽培する人はいなくなったが、そのコムギは石垣島のLさんによって栽培されている。そして、ここで注目したいのは、祭祀のためということだけでなく、Nさんのように、個人的な嗜好にともなう場合でも、他所から伝統的畑作穀類の種子が取り寄せられ、栽培が復活することもあるという点である。

そして、これに関連してあげておきたい事例がある。竹富島のOさん（男性：1930年代前半生まれ）は、種子取祭のためにアワを栽培する1人であるが、2004年、竹富島ではすでに栽培が途絶え、おそらくは鳥が種子を運んで生育したと思われるモロコシを偶然みつけ、それを採取して栽培を始めた。その後、そのモロコシは以前島で栽培されていたものとは性質が違うという

ことで、2005年に白保から新たにモロコシの種子を入手して栽培している。

このOさんの事例は、偶然性がモロコシの栽培を始めるきっかけとなったものであるが、Oさんは、現在は行く人がほとんどいなくなった種子取祭での種子下ろし儀礼を毎年続けている人であり、また種子取祭でのホンジャーの血筋を引くともいう。このことから、Oさんは種子取祭をはじめアワの栽培などに関心が高い人であったといえ、こうした背景のもと、偶然性からモロコシの栽培復活に至ったのだと考えられる。

なお、南島においてはいくつかの地域で現在もモロコシの栽培が行われている。筆者の知ったところでは、奄美大島宇検村名柄集落・部連集落や石垣島白保などで、自家消費用として少ないながらも地域的に栽培が昔より続いている。そして、そこでの栽培をみると、名柄・部連では長年島外に暮らして最近になってUターンしてきた人が、知り合いからモロコシの種子を分けてもらって栽培を始めるといふ事例が認められ、また、白保においても最近になってモロコシの栽培を始めたという農家の人もいた。これは、祭祀だけに限らず自家消費目的で行われている栽培でも、先述の竹富島や伊良部島におけるアワ栽培と同様、栽培存続の背景に、新たなる栽培の継承者の出現があることを示すものといえる。

## (2) 栽培の実践をめぐって

筆者が聞き取り調査を行った石垣島や竹富島、伊良部島などでの栽培方法等をみると、それはキビ栽培のように播種機やコンバインが用いられるなど、その作業過程において機械化が進んでいるという状況ではなかった。その一因は、各家での栽培量が小規模なものにとどまっていることにあると考えられる。しかし、それらがまったく昔と同じ方法で栽培されているという状況でもなかった。

かつて先島諸島においては、アワの収穫には専用の穂刈カマがあり、精白調整には専用の石ウスや木スリウスが用いられた<sup>(16)</sup>。竹富島のPさん（女性：1920年代後半生まれ）は、現在もアワの収穫には穂刈カマを使い、脱穀にはウス・キネを用いているが、その精白は精米機を用いて行っている。また、同島のQさん（男性：1920年代後半生まれ）は、収穫には普通のカマを用いて穂刈りして、木製ハンマーで穂を叩いて穀粒を落とし、精白は人に頼んで精米機で行っている。

このように、中には昔ながらの穂刈カマを使う人もいるが、今日では普通のカマで収穫を行い、精白には精米機もしくはミキサーが用いられるのが一般的であり、キビのように播種機やコンバインの導入とまでは至っていないが、その使用具には変化がみられる。

また、祭祀等にとまなう栽培の場合、それらの作物が農業経営という経営戦略の中で位置づけられているという状況はほとんどない。それは、かつてのように生活の糧としての必要性から何反もの畑に広く作付けされることはなく、畑や屋敷地内の空きスペースを利用して小規模に作付けされる場合がほとんどであるからである。

例えば、伊良部島では、サトウキビが基幹作物として多くの割合をもって栽培されている。そして、アワが農用地で栽培される場合、アワは、主にサトウキビの苗を移植して空いた場所や、

サトウキビを作付けできない石の多いような箇所、またサトウキビが栽培されている畑の端などに作付けされており、農業経営の核となるサトウキビが優先される形で、その支障にならないようにアワが栽培されている。

さて、石垣島白保や竹富島、伊良部島佐良浜などでは、アワが収穫されると、それで祭用の神酒やモチなどを作るために、通常は精米機やミキサーを用いて精白される。しかし、石垣島宮良のHさんの場合、アワの脱穀・精白作業は行わないということだった。

Hさんによるアワ栽培は、基肥を入れておいた2坪程度の場所に播種を行い、芽が出ると間引き・除草をして具合をみつつ追肥をする。そして収穫は普通のカマで行うといい、ここまでは一般的にみられる栽培方法である。しかし、収穫後の脱穀・精白作業は行わないとのことだった。

それは、Hさんがアワを栽培するのは宮良の結願祭のためにということであり、結願祭でのアワの用いられ方は、アワの穂を御嶽の鳥居に飾ったり、神司がアワ穂をもって舞うのに用いられるだけで、アワを脱穀・精白する必要がないからだという。そして、Hさんは自分が作っているアワを食べたことがないので、そのアワがウルチ性なのかモチ性なのかも知らないということだった。

また、石垣島平得のRさん（男性：1920年代後半生まれ）の場合もHさんと似ている。Rさんは、平得での祭に使われる小道具を製作する役をしており、種子取祭や豊年祭で神司が行列をするときにアワやイネの穂を入れたカゴをもつことから、そのためのアワ（モチ性）を栽培している。アワは現在自宅敷地内の家庭菜園で栽培されているが、それは正月頃にバラ播きして、その後の成長の良いものだけを選んで移植して、6月に刈り取るという。筆者が聞き取りをした2004年3月時点では、5本の株だけが作付けされていた。そして、カゴに飾りつけるアワは傷むとつけ替えるだけなので、毎年新しいアワが必要というわけではないが、種子を絶やさないために、毎年アワを栽培しているといい、その種子は古くより平得で栽培されてきたものだという。そして、Rさんは、アワは祭の小道具に使うだけであり、脱穀・精白がたいへんなのでアワを食べることはしないという。

このように、祭祀にともなう栽培をみると、祭祀における作物の使われ方、すなわち祭においてその作物で祭祀食を作るか作らないかによって、その最後の作業工程に差異が生じていることがわかる。また、Hさんのように食さないことから、自分が栽培しているアワの性質を知らないということもみられるのである。

#### IV. 人々の行動と栽培の展開

以上、キビ栽培および祭祀等にともなう栽培について、栽培の復活と実践的な側面を中心にみてきた。ここで取りあげた事例が、今日の伝統的畑作穀類の栽培に携わる人たちのすべての意志や行動を網羅しているものではないが、その栽培に取り組む人々の様々な意志と行動の一端を示し得たといえる。

これらの事例をキビ栽培と祭祀等にもなう栽培とに分けて比較した場合、キビ栽培に携わる人たちには、Eさんのように、収益性を意識してキビ栽培に取り組む人が相対的に多い。これについては、キビがある程度換金性をもつ作物として栽培が広がっていることを考えると当然のことであろう。しかし、キビを栽培する人たちの中には、Fさんのように、その嗜好性により自家用としてのみ栽培する人もいる。この点で、個人的な嗜好によりムギやモロコシなどを栽培する人がいるという状況と似た様相をもつ。また、竹富島でアワを栽培する人の中には、基本的な栽培理由は種子取祭のためにということではあるが、同時にアワが種子取祭用に売れる<sup>(17)</sup>ということも少しはあるという人もおり、少なからずアワに収益性を意識している人もいる。

はじめに述べたように、キビ栽培と祭祀等にもなう栽培との間には、キビは今日の社会状況に適応する形で栽培を拡大しているのに対して、祭祀等にもなう栽培は限られた地域的枠組みの中だけで収まる傾向にあるというような、大枠での特徴が認められる。しかし、今みたように栽培者個々でみると、両栽培間で違いをそれ程感じさせない意識や実践をもって栽培に取り組んでいる人もいる。これは、個々の栽培者が各々の考えをもって栽培に取り組んでいるからであり、大枠での差異を超えて、それぞれの栽培者の意志や行動の中には相似するものがあるということなのであろう。そして、相似する栽培者の意志や行動の集約した姿が、ある作物栽培の特徴として、また、ある地域における特徴となって現出するのである。

ところで、竹富島のQさんは、種子取祭用のアワだけでなく、最近になってキビも自家用に栽培を始めた。Qさんによると、もし種子取祭でアワが必要でないのなら、食べておいしいキビをもっと多く作るだろうという。これは、アワが種子取祭に不可欠なものと竹富島の人たちに強く意識されていることを表わすとともに、今日の社会状況において食品としてはキビの方が好まれているということを示すものといえる。

さて、ここでもう1点、栽培者個人の意志・行動と伝統的畑作穀類栽培の展開をみるにあたって注目したい事象がある。それは、これら栽培に関わる一個人の行った行動が、その後の栽培展開に大きな影響を及ぼしているという点である。

その一例としては、波照間島のDさんが、キビ栽培用にと精米機やコンバインを他の栽培者に先駆けて購入したことが、波照間島での機械化を促進し、それがキビ栽培の拡大へと繋がったということがあげられる。そして、このほか、さらに伝統的畑作穀類栽培の復活をめぐる注目したい事象がある。

先述したように、渡名喜島と粟国島では、他所から新たにキビの種子が導入されて栽培が復活したが、粟国島では、島の一農家であるBさんが渡名喜島の親戚を通じてその種子を取り寄せた。また、渡名喜島の場合、その先導役となったAさんは当時の村長であるので、まったく一個人としての行動とはいえないが、キビがかつて島で栽培されていたので高齢者にも栽培しやすいのではないかという発想によって、キビの種子の導入に至った。

さらに、祭祀等にもなう栽培においても、石垣島白保のGさんは、伊良部島からアワの種子を取り寄せ栽培を始め、宮島のHさんも、Gさんからアワの種子を分けてもらい結願祭用に栽培を始めた。また、竹富島のNさんは、自家消費用としてコムギの種子を埼玉に住む親戚を

通じて取り寄せ、そして、その種子が石垣島のLさんにも分けられた。

このように、今日の南島における伝統的畑作穀類栽培の復活の第一歩というものが、栽培に関わる人たちの個人的な発想および行動から始まっている場合が多いのである。そして、これら作物の栽培復活に関してはさらに興味深い事象がある。それは、これらの種子が広い範囲にわたって移動しているという事実である。

渡名喜島では、当初石垣島からキビの種子が導入されたが、それは定着せず、その後熊本県から導入されたキビの種子が定着した。その後、粟国島へはこの熊本県の種子が渡名喜島からもたらされた。そして、もともとウズラシンというキビが栽培されていた波照間島へも、Cさんによって渡名喜島からキビの種子がもたらされ、現在、この品種が波照間島で広く栽培される状況となっており、さらにこの品種が石垣島や竹富島など八重山のほかの島へも広がりつつある。

これは、筆者が聞き取り調査で確認した範囲であり、この他にも別ルートのある可能性もあるが、ここで注目すべきは、最初熊本県から渡名喜島へ移入されたキビの種子が、今日の南島におけるキビの栽培品種としてかなり広がっているという点である。それも、最初の渡名喜島への導入を除いては、組織だった取り組みとしてではなく、栽培者個人の行動を発端としてである。そして、この広がり、渡名喜島から粟国島・八重山だけにとどまらず、これら栽培地においては、沖縄本島など他の島の知り合いにキビの種子を分けたという人もいる。今のところ筆者は、それらの分けられたキビが実際に栽培されているのか、また栽培が地域的に拡大しているのかなどの実態までは把握できていないが、この熊本県のキビ品種は、かなり広範に南島各地に広がっているようである。

また、このような種子の移動はキビだけに限らず、祭祀等にとまなう栽培の場合でも、石垣島白保のGさんをはじめとする例がある。そして、これら種子の移動の多くの場合、栽培者の個人的な行動によっているのである。

このように、今日の伝統的畑作穀類の栽培復活においては、個人の行動というものがかなり大きな役割を果たしている。さらに、個人による行動が、南島各地への種子の広がりという事態をも生みだしているのである。そして、このことは現代南島での伝統的畑作穀類栽培の地域展開を読み解く上で、栽培者個人の意志や行動についても検討する必要性のあることを示すものといえよう。

ところで、こうした作物の種子の移動ということに関連して、1つの興味深いことがある。それは、南島各地で伝わる作物の品種名についてである。

かつて、南島においてはアワやキビなどには数多くの品種があった。それは、ウルチ性やモチ性、早生種や晩生種など様々で、地域によって記憶されている品種に違いはあるが、それらの品種名には、アワなどの基本となる作物名の前に、その特徴を冠する形で呼称されるものが多くみられる。例えば、先述したように、ウズラシンは鶉のような色合いから、そしてスーシンは白いキビというようにである。そして、ここで注目したいのが地名や個人名を冠する品種名である。それは、どこそこの島から種子がもたらされたということで、タラマアワやトナキアワなどというように地名を冠する品種名であったり、また誰々がこの種子を島にもってきたということで、

表1 地名・人名がつくアワ品種

島名	品種名 (由来)
古宇利島	アガイジョーアワ (アガイジョウという人がもたらす)
池間島	クミチマ (久米島からのアワ)
大神島	クミチマ (池間島から導入)
竹富島	ユナーンムチャー (与那国島からのアワ) ハテルマムチャー (波照間島からのアワ) フシマムチャー (黒島からのアワ) ヒサーラムチャー (宮古島平良からのアワ)
波照間島	ヤマタブヤン (ヤマタという人がもたらす) マーシブヤン (マーシという人がもたらす) タラマアン (多良間島からのアワ) トナキアン (渡名喜島からのアワ)

\*波照間島については筆者の聞き取り。他は注(18)文献による。

人物名を冠する品種名などが南島各地で記憶されている (表1)。

今日では、こうした品種の正確な来歴をたどることはかなり困難であるが<sup>(18)</sup>、少なくとも過去のある時期に、いくつかの島々の間でアワなどの種子の移動があったのであろう。そして、こうした種子の移動が、公的権力による政策的なものなのか、もしくは島人たちの個人的な行動によるものなのかはわからない。しかし、今日ほど交通便や情報網が発達していなかったであろう時代に、海に隔てられた島という環境にあって、このような種子の移動があったということは、そこにより良い作物・品種を常に求めようとする強い意志をもった島人たちの存在が感じられるのである<sup>(19)</sup>。

そして、再び今日の伝統的畑作穀類の種子の移動という点についてみると、今日ではそれら作物の日常生活に占める必需性というものは低く、その栽培が日々の生活に直結していた時代とまったく同等に扱うことはできない。しかし、こうした現在の状況においても、個人の行動によって伝統的畑作穀類の種子の移動が起きているという事実は、今日の南島にそれらの栽培に対しての思いを抱く人々が確固として存在していることを我々に示すものといえる。そして、そのような思いを人々に抱かせるだけの伝統的基盤が南島地域社会に根強く残っていることを示すものといえる。

## V. おわりに

以上、今日南島における伝統的畑作穀類栽培の展開を、その栽培に関わる人たちの意志や行動に焦点をあててきた。その結果、各人は、それぞれの意志のもと様々な実践をもって栽培に取り組んでいることが明らかとなった。また、個人のレベルにおいては、キビ栽培や祭祀等にとまなう栽培などという違いを超えて、それぞれでよく似た意志や行動をもって栽培に取り組む人たちがいることも示し得た。おそらく、このような栽培者の様々な意志や行動というものは、農業全般においてもみられることであろう。農業従事者はそれぞれにおかれている状況の中で、様々

な意志をもって農業に取り組んでいるのであり、キビやアワなどの伝統的畑作穀類の栽培においても、ほかの作物栽培と同様のことがみられたということになるのであろう。

また、個人の意志や行動が、南島での伝統的畑作穀類栽培の展開において、非常に重要な役割を担っていることが明らかとなった。それは、南島各地におけるキビやアワなどの栽培復活のきっかけをもたらしたことであり、さらには南島各地への種子移動という展開に大きく関わっていたのである。そして、このような伝統的畑作穀類栽培の復活や種子の移動という行動に人々を駆り立てる根本的な要因としては、おそらくは、今日においても南島の地域社会に、人々がそれらの栽培に思いを馳せるだけの伝統が依然として根強く残っていることにあるといつてよかろう。

さらに、これは栽培断絶からの復活ではないが、竹富島の種子取祭に関わって個人的に新たにアワ栽培を始めた K さんや L さんの場合や、また伊良部島佐良浜でアービューイ用のアワを作り始めた M さんの場合も、その根底には、それぞれの地域で重要視される祭祀の存在を背景としつつ、アワ栽培に対しての伝統的な思いがあったものと考えられる。また、自家消費を目的とする場合においても、奄美大島名柄・部連や石垣島白保でのモロコシ栽培にみるように、島への U ターン者などが新たに種子を入手して栽培を始めるという状況が認められ、これも地域社会に息づくモロコシの栽培や食の伝統が基盤としてあるものと考えられる。

つまり、こうした事象は、これまでにみてきた栽培復活の事例も含めて、キビやアワなどの伝統的畑作穀類栽培に対してのいわば伝統的回帰行動といえるものではないだろうか。それは、ある一個人が、何らかのきっかけにより、伝統的な思いや懐かしさをもって、今日では過去のものとしてみられがちな伝統的畑作穀類の栽培へと回帰していくのである。そして、各人のとった伝統的回帰行動がきっかけで、キビ栽培の場合、今日の社会状況に適應する形で、その栽培が南島のいくつかの地域で定着・拡大していった。また、祭祀等にもなう栽培の場合、その栽培が大きく拡大するといった傾向にはないが、そうした伝統的回帰行動が、地域における畑作穀類栽培の継承等に繋がっているのである。

以上のように、南島の伝統的畑作穀類栽培の展開においては、それら栽培に携わる人たち個々の意志や行動というものが大きく関わっている。そして今回、人々の意志や行動に目を向けることによって、これまでの各栽培地を対象とした事例研究からはみえてこなかった、南島全体にわたっての伝統的畑作穀類栽培の展開の一端が明らかになったといえる。

#### 注

- (1) 南島におけるアワやムギなどの栽培については、これまで佐々木や植松が詳しく論じている。①佐々木高明「沖縄本島における伝統的畑作農耕技術—その特色と原型の探求—」『人類科学』25, 1973, 79-107 頁。②佐々木高明「南島における畑作農耕技術の伝統」九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂, 1976, 25-40 頁。③佐々木高明『南からの日本文化(上)・(下)』日本放送出版協会, 2003。④植松明石「新城島の畑作」『八重山文化』2, 1974, 36-44 頁。⑤植松明石「沖縄, 八重山の畑作とその儀礼」『跡見学園女子大学紀要』10, 1977, 43-65 頁。
- (2) ①拙稿「沖縄県渡名喜島・粟国島における伝統的作物キビの復活とその背景」『人文地理』52-1, 2000, 67-83 頁。②拙稿「現代南島における伝統的作物の復活—沖縄県石垣島・波照間島のキビ栽培を中心に—」『史泉』96, 2002, 21-39 頁。③拙稿「沖縄県渡名喜島・粟国島のキビ栽培の復活とその

- 背景」平岡昭利編『離島研究』海青社，2003，95-112頁。(③は，①に新しいデータを加え，②も踏まえ加筆したものである)
- (3) ①拙稿「沖縄県竹富島における伝統的作物アワの栽培存続とその背景—種子取祭との関係を中心に—」『農耕の技術と文化』26，2003，53-84頁。②拙稿「宮古諸島・伊良部島におけるアワ栽培の存続と地域社会」平岡昭利編『離島研究Ⅱ』海青社，2005，185-200頁。
  - (4) 2001年で渡名喜島においては68戸がキビ栽培を行い，栽培面積が9haであった。(渡名喜村役場提供資料による)
  - (5) 2001年で粟国島においては60戸がキビ栽培を行い，栽培面積は20haであった。(粟国村役場提供資料による)
  - (6) 波照間島においては，1997年で91戸がキビ栽培を行い，栽培面積は68haであり，その後2000年までおおむね70~80haの栽培面積で推移しているという。(竹富町役場提供資料による)
  - (7) グレインタンク方式とは，刈り取った籾を容量の少ない籾袋ではなく，コンバイン内蔵のタンクに蓄える方式のもので，刈り取り作業が効率的に進むという。
  - (8) 渡名喜島では2002年から，粟国島では2001年から村役場が導入した乾燥機が稼働している。
  - (9) 白保では，2000年までの調査で10戸程度の農家がキビを栽培していた。その栽培が少ないことから行政機関などでの統計調査の対象とはなっていない。なお2000年農業センサスによる白保の農家数は175戸である。
  - (10) コンバインを使うと脱粒した状態で収穫されるので，自動車ですべて脱穀することは行われない。
  - (11) モチアワとモチゴメ，アズキを材料に練って作るモチである。拙稿「竹富島におけるアワのモチ「イヤーチ」・「ムチャニ」作りの伝統と変容」『民具マンスリー』37-7，2004，1-14頁。
  - (12) 2005年に筆者が確認した範囲では9名がアワを栽培していた。
  - (13) この他に2005年までに3名が再びアワ栽培を再開したことを確認した。
  - (14) サイタマとよばれたのは埼玉27号という品種であり，Nさんが取り寄せたコムギは農林61号であり，かつてのサイタマではなかった。
  - (15) 自分で作ったコムギ粉は販売されているものとは味が違い，それで天ぷらなどを作るためだという。
  - (16) 拙稿「先島諸島におけるアワ用農具の形態と地域性」『関西大学博物館紀要』3，1997，218-240頁。
  - (17) 2004年で精白したアワ1升が2500円で売買されていた。また伊良部島佐良浜においても多くアワを作った人が知り合いに譲ったりして，精白アワ1升が大体1000円であるという。
  - (18) 表1で来歴のわかるものとして，クミチマは30年前に久米島から導入されたといい(竹井恵美子「南西諸島における雑穀の在来品種と食品利用」『大阪学院大学人文自然論叢』20，1989，87-103頁)，筆者も2004年に池間島で1920年代後半生まれの男性から，戦後男性の親戚筋が漁業で久米島に行ったときにアワの種子を持ち帰り，それがクメジマアワとして栽培されるようになり，大神島と伊良部島佐良浜へも渡ったという話を聞いた。
  - (19) 南島においては畑作穀類などの作物が他所から伝来したという伝承が各地に伝わっている。増田は八重山各地の作物の伝来譚をまとめている。増田昭子「八重山における五穀の語り」沖縄国際大学南島文化研究所編『石垣島調査報告書(3)—地域研究シリーズ No. 33—』，2005，1-22頁。

(吹田市立博物館)